

# 国選定 重要文化的景観「智頭の林業景観」

## 智頭林業

**智頭林業**の始まりについては良くわかっていませんが、智頭の町内に樹齢350年を超えるスギの巨木(慶長年間に植栽されたと伝えられ、地元で慶長スギと呼ばれる)が約20本現存していることから、徳川初期には造林が行われていたものと考えられます。この慶長スギは日本で最も古い人工林の一つです。しかし、当時は天然生の用材が得られたことから、造林については規模も小さく、植栽した場所も限定されていたものと思われます。

智頭に林業が栄えた理由として、智頭林業技術史<sup>\*</sup>)を著した久田喜二氏は、1) 智頭には徒歩交通時代の主要街道が町を貫通していたこと。つまり中国山脈を越え山陰と山陽を結ぶ街道があり、しかも鳥取から約半日の行程にあったこと。2) この地方に天然生用材林が豊富に存在していたこと。3) スギ・ヒノキ等の有用樹の植林適地に恵まれていたこと。4) 大径優良材を産出する育林技術の定着があったこと。5) 鳥取の市場(藩)に直結する千代川を利用して木材を筏(いかだ)で鳥取まで運ぶことが出来たことなどをあげています。木材の輸送については、陸路での移送手段として道路の整備や森林軌道の敷設が進むまで、筏による流送が主流であったと考えられますが、筏流しの様子を物語る資料はほとんど残っていません。わずかに筏を組む際に使われる“イカダヨキ”が伝えられており、鳥取県の文化財に指定されています。

<sup>\*</sup>久田喜二(S47)「智頭林業技術史」林業技術史第1巻より



沖の山国有林内に設置された看板。当時の森林軌道の様子がよくわかります。

天然スギの下枝が雪に押されて地面に接し、そこから発根し別個体として成長します。このことを伏条(ふくじょう)更新と呼んでおり、多雪地帯に生育するスギの特徴となっています。



智頭町内に存在する100年を超えるスギ人工林。左のスギの根元に人が立っていますので、その大きさがわかります。

**慶長スギ**を始めとし、古くから植林が行われてきた智頭宿周辺とは異なり、天然スギを始めとする優良樹が多く生育する沖ノ山国有林では、天然林からの大径の優良材生産が行われてきました。奥山で伐採された木材は、古くは木馬や筏で搬出されましたが、大正11年には国有林に森林軌道が敷設され、道路の整備も進められ、搬出方法が水路から陸路へと変わってきました。現在では森林軌道も廃止され、トラックでの輸送が行われています。沖ノ山国有林でのスギ造林は昭和29年ごろから本格的に行われました。

**智頭林業**では優良大径木の生産を目的とした長伐期施業が主流となります。苗木の生産では、天然林から稚樹や挿し穂、そして種子が採取され、苗木が作られました。有名林業地であった奈良の吉野から種子が導入されたこともあったようですが、多雪地帯という環境に合わず、うまくゆかなかったようです。明治に入ると、**赤挿し苗**といって、伏条更新した若木から採取した、赤褐色になった部分を含む枝を用いての挿し木苗生産が行われるようになります。赤褐色になった枝からの発根が良いのも**多雪地帯に生育する智頭のスギ**の特徴です。

植栽では、智頭では通常1ヘクタールあたり2500~3000本の苗木が植えられます。その後、成長する過程で、下刈りや密度を調節する除伐、間伐、そして木材の品質を向上させる枝打ちが繰り返され、約60~70年で収穫の対象となる林に育ちます。